

## ビーチサッカー競技規則 2021/22 主な改正

### ビーチサッカー競技規則の修正

各国サッカー協会(ならびに大陸連盟および FIFA)は、その責任において、ビーチサッカー競技規則のうち次の競技会規定に関する項目の全部または一部を修正することができるとする。

ユース、年長者、障がい者およびグラスルーツのビーチサッカー

- ・ ピッチの大きさ
- ・ ボールの大きさ、重さ、材質
- ・ ゴールポストの間隔とクロスバーのピッチ面からの高さ
- ・ (同じ長さの)3つのピリオドからなる試合時間(および、1つのピリオドからなる延長戦の時間)

また、各国サッカー協会がそれぞれの国内ビーチサッカーの利益と発展のためさらに弾力性を持つよう、FIFA は、ビーチサッカーの「カテゴリー」に関して以下の変更を承認した。

- ・ 女子ビーチサッカーを別のカテゴリーとするのではなく、今後は男子ビーチサッカーと同じ位置づけにする。
- ・ ユースおよび年長者の年齢制限の撤廃 — 各国サッカー協会、大陸連盟および FIFA は、これらのカテゴリーの年齢制限を弾力的に決定できる。
- ・ 各国サッカー協会は、裾野レベルのビーチサッカーにおいて、どの競技会を「グラスルーツ」とするのかを決定する。

各国サッカー協会には、上記の修正を行うことや、どのレベルにおいて修正するかを FIFA に報告するよう求められている。なぜなら、こうした(特に修正を行う理由についての)情報があれば、ビーチサッカー発展のためのアイデアや戦略を明確にし、FIFA が他国のサッカー協会と共有して競技の発展を援助できる可能性があるからである。

### 第1条—ピッチ

主審・第2審判が仮想のコーナーアークを特定するために、それぞれのコーナーから 1m のゴールライン上とタッチライン上にマークを描かなければならない。

### ゴール

ゴールポストとクロスバーは、承認された材質でできていなければならない。危険なものであってはならない。両ゴールのゴールポストとクロスバーは同じ形状で、正方形、長方形、円形、楕円形またはこれらの組み合わせのいずれかでなければならない。

### 第3条—競技者

1チームあたり同時に最大5人の交代要員のウォームアップが認められる。

### 第4条—競技者の用具

## その他の用具

ヘッドギア、フェイスマスク、また、膝や腕のプロテクターなど危険でない保護用具で、柔らかく、軽いパッドが入った材質でできているものは、ゴールキーパーの帽子やスポーツめがねと同様に認められる。

## ビブス

ビブスは、交代要員と交代して退く競技者を区別するため、シャツの上に着用しなければならない。ビブスは、両チームのシャツと相手チームのビブスの色と異なるものとする。

## 膝および腕のプロテクター

膝や腕のプロテクターを着用する場合、シャツの袖の主たる色と(腕のプロテクター)、ショーツまたはトラックスーツのパンツの主たる色(膝のプロテクター)と同じ色でなければならず、過度に大きなものであってはならない。色が合わせられない場合、シャツの袖やショーツ(または、着用する場合はトラックスーツのパンツ)がどのような色であっても、黒または白のプロテクターを着用することができる。シャツの袖またはショーツ(または、トラックスーツのパンツ)と色が合わないプロテクターを着用する場合、そのプロテクターはすべて同じ色でなければならない(黒か白で)。

さらに、

- ・ 電子的パフォーマンス・トラッキングシステム(EPTS)を含む。
- ・ スローガン、メッセージ、イメージと広告についての追加条項を含む。

## 第5条—主審・第2審判

### 職権と任務

主審・第2審判は、

- ・ (...)
- ・ 主審・第2審判は、競技者が重傷を負ったと判断した場合、プレーを停止し、確実に競技者をピッチから退出させる。負傷した競技者は、ゴールキーパーを含め、ピッチ内で治療を受けることはできず、プレーが再開された後のみ、ピッチに戻ることができ、競技者は交代ゾーンからピッチに入らなければならない。ピッチから退出を求められないのは、次の場合に限られる。
- ・ (...)
- ・ チーム役員が責任ある態度をとれないのであれば、注意、警告を与える、またはピッチおよびテクニカルエリアを含むその直近の周辺からの退場を命じる。反則を犯した者が特定できなかった場合、テクニカルエリアにいる、より上位のコーチが罰則を受ける。なお、退場となる反則を犯したチームのメディカルスタッフは、他にそのチームで対応できるメディカルスタッフがおらず、競技者に治療が必要な場合、試合にとどまることができる。

### 主審・第2審判の用具—基本的な用具

主審・第2審判は、次の用具を携行しなければならない。

- ・ 笛(少なくとも1つ)
- ・ レッドカード、イエローカード
- ・ ノート(または試合を記録するためのその他の道具)

- ・ 時計(少なくとも1つ)

### その他の用具

主審・第2審判は、以下のものを用いることが認められる。

- ・ その他の審判員との通信のための用具ーヘッドセットなど
- ・ EPTS またはその他のフィットネスモニタリング機器

主審・第2審判は、カメラを含むその他の電子機器を着用することができない。

## 第6条ーその他の審判員

### リザーブ副審

リザーブ副審が割り当てられる大会や競技会における役割と任務は、ビーチサッカー競技規則に規定される条項に基づくものでなければならない。

リザーブ副審は、

- ・ 競技会規定に基づき割り当てられ、主審・第2審判のいずれかが試合を審判することができなくなった場合、第3審判に代わる。
- ・ 試合前、試合中または試合後、主審・第2審判の要請に従って、管理運営上の任務を含め、常に主審・第2審判を援助する。
- ・ 試合後、主審・第2審判の視野外で起きた不正行為またはその他の出来事について関係機関に報告する。また、その他の報告書の作成において、主審・第2審判を援助する。
- ・ 試合前、試合中または試合後に起きたすべての出来事を記録する。
- ・ 何らかの出来事が起きたときに必要になる予備の手動式ストップウォッチを携帯する。
- ・ 試合に関する適切な情報を提供し、主審・第2審判を援助できるようなポジションをとる。

## 第7条ー試合時間

### プレーのピリオドの終了

タイムキーパーは、12分間のピリオド(および延長戦のピリオド)の終了をそれぞれ音により合図する。

- ・ 主審・第2審判が終了の合図の笛を吹かない場合でも、音による合図があったとき、ピリオドは終了する。
- ・ ピリオドの終了間際にフリーキックまたはペナルティーキックが与えられた場合、キックが完了したときに、ピリオドは終了する。ボールがインプレーになった後、次のことが起きたときにキックは完了する。
  - ボールの動きが止まった、またはアウトオブプレーになった。
  - ボールが、守備側ゴールキーパーを除く、いずれかの競技者(キッカー本人も含む)によってプレーされた。
  - キッカーまたはキッカーのチームの競技者に反則があり、主審・第2審判がプレーを停止した。

守備側チームの競技者が、キックが完了する前に反則をした場合、主審・第2審判はビーチサッカー競技規則に従い、フリーキックまたはペナルティーキックをあらたに行う、または再び行い、試合を続ける。

- ・ タイムキーパーの音による合図によってピリオドの終了が示された後であっても、上記の状況においてのみ、第1条と第10条の規定に基づきボールがゴールに入ったときに限り得点が認められる。

これ以外のケースで、ピリオドは延長されない。

### **第8条—プレーの開始および再開 キックオフの進め方**

- ・ コイントスに勝ったチームが、第1ピリオドにどちらのゴールを攻めるのか、またはキックオフを行うのかを決める。
- ・ この結果により、相手チームがキックオフを行うのか、または第1ピリオドにどちらのゴールを攻めるのかを決める。
- ・ 第1ピリオドにどちらのゴールを攻めるのかを決めたチームは、第2ピリオド開始のキックオフを行う。
- ・ 第2ピリオドには、両チームはエンドを替え、反対のゴールに攻める。
- ・ 第3ピリオドの前に再びコインをトスし、勝ったチームがどちらのゴールを攻めるのか、またはキックオフを行うのかを決める。
- ・ この結果により、相手チームがキックオフを行うのか、または第3ピリオドにどちらのゴールを攻めるのかを決める。
- ・ (...)

すべてのキックオフにおいて、

- ・ キックオフを行う競技者を除いて、すべての競技者はピッチの自分たちのハーフ内にいなければならない。
- ・ (...)
- ・ ボールは、けられて明らかに動いたときインプレーとなる。
- ・ キックオフから相手競技者のゴールに直接得点することができる。ボールがキッカー側のゴールに直接入った場合、相手競技者にコーナーキックが与えられる。

#### **【日本サッカー協会の解説】**

「キックオフから相手競技者のゴールに直接得点することができる」とした改正は、直接のシュートを防ぐ守備側競技者の安全を損なうリスクが指摘され、FIFA ビーチサッカーワールドカップロシア 2021を含め、一時的に適用を見合わせるようになっていました。そのため、国内においてもFIFAから新たな連絡があるまで、この改正の適用を一時的に停止することにしました。

#### **ドロップボール**

- ・ 次の状況でプレーが停止された場合、ボールはペナルティーエリア内で守備側チームのゴール

- キーパーにドロップされる。
- ボールがペナルティーエリア内にあった。または、
- ボールが最後に触れられたのがペナルティーエリア内であった。
- ・ その他のすべてのケースにおいて、主審・第2審判のいずれかは、ボールが最後に競技者、外的要因または審判員に触れた位置で、最後にボールに触れたチームの競技者の1人にボールをドロップする。
- ・ (両チームの)他のすべての競技者は、ボールがインプレーになるまで2m以上ボールから離れていなければならない。
- ・ ボールがピッチに触れたときにインプレーとなる。
- ・ (...)
- ・ ドロップされたボールが2人以上の競技者に触れることなくゴールに入った場合、プレーは次のように再開される。
  - ボールが相手競技者のゴールに入った場合は、ゴールクリアランス
  - ボールがドロップされた競技者のチームのゴールに入った場合は、コーナーキック

#### **第9条—ボールインプレーおよびボールアウトオブプレー**

##### **ボールアウトオブプレー**

(...)

ボールは、審判員に触れ、ピッチ内に残った場合も、次のときにアウトオブプレーになる。

- チームが大きなチャンスとなる攻撃を始める。または、
- ボールが直接ゴールに入る。または、
- ボールを保持するチームが替わる。

これらの3つのケースでボールが審判員に触れた場合、プレーは、ドロップボールによって再開される。

#### **第10条—試合結果の決定**

##### **仮想のペナルティーマークからのキック**

両チーム5本のキックを行う。3本ではなくなった。

試合後に仮想のペナルティーマークからのキックが行われるとき、他に規定されていない限り、ビーチサッカー競技規則の関係諸条項が適用される。試合中に退場を命じられた競技者のキックへの参加は認められないが、試合中に示された注意や警告は、仮想のペナルティーマークからのキックに繰り越されない。

##### **仮想のペナルティーマークからのキックの開始前**

- ・ (...)
- ・ 試合または延長戦が終了したとき、仮想のペナルティーマークからのキックを行う前に一方のチームの競技者数(交代要員を含む)が相手チームより多い場合、競技者数の多いチームは相手

の競技者数と等しくなるように競技者数を減らすこともでき、除外する場合、除外するそれぞれの競技者の氏名と番号は、主審・第2審判に通知されなければならない。除外された競技者は、キックに参加する資格がない(下記の場合を除く)。

#### 仮想のペナルティーマークからのキックの進行中

- ・ (...)
- ・ ゴールキーパーが反則を犯し、その結果キックを再び行うことになった場合、1 度目の反則であったなら、ゴールキーパーは、注意され、その後も反則を犯したならば、警告される。
- ・ (...)
- ・ ゴールキーパーとキッカーの両方が同時に反則を犯した場合、キックは失敗として記録され、キッカーは警告される。
- ・ 仮想のペナルティーマークからのキックが進行中に、一方のチームの競技者数が相手チームより少なくなった場合、競技者のより多いチームは相手競技者数と等しくなるように競技者数を減らすこともでき、除外する場合、除外するそれぞれの競技者の氏名と番号は、主審・第2審判に通知しなければならない。除外された競技者は、それ以降、キックに参加することができない(上記の場合を除く)。

#### 第12条ーファウルと不正行為

##### ボールを手や腕で扱う

ハンドの反則を判定するにあたり、腕の上限は、脇の下の最も奥の位置までのところとする。

競技者の手や腕にボールが触れることのすべてが、反則にはならない。

競技者が次のことを行った場合、反則となる。

- ・ 例えば手や腕をボールの方向に動かし、手や腕で意図的にボールに触れる。
- ・ 手や腕で体を不自然に大きくして、手や腕でボールに触れる。手や腕の位置が、その状況における競技者の体の動きによるものではなく、また、競技者の体の動きから正当ではないと判断された場合、競技者は、不自然に体を大きくしたとみなされる。競技者の手や腕がそのような位置にあったならば、手や腕にボールが当たりハンドの反則で罰せられるリスクがある。
- ・ 相手チームのゴールに次のように得点する。
  - 偶発的であっても、ゴールキーパーを含め、自分の手や腕から直接。
  - 偶発的であっても、ボールが自分の手や腕に触れた直後に。

ゴールキーパーは、自分のペナルティーエリア外でボールを手または腕で扱うことについて、他の競技者と同様に制限される。ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、認められていないにもかかわらず手や腕でボールを扱った場合、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則にはならない。しかしながら、プレーが再開された後、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが再びボールに触れる反則の場合(手や腕による、よらないにかかわらず)、相手の大きなチャンスとなる攻撃を阻止した、または相手の得点や決定的な得点の機会を阻止したのであれば、懲戒の罰則が与えられる。

##### シザーズキック/オーバーヘッドキック

(...)

相手競技者がシザーズキックやオーバーヘッドキックを行うのを妨げた競技者を罰するために、主審・第2審判は、次の基準を考慮しなければならない。

- ・ (...)
- ・ シザーズキックやオーバーヘッドキックを行うために、手や腕以外の体のいかなる部位でボールをコントロールした後、ボールが依然空中にあり、競技者の前または横で、競技者の近くにある場合、ボールは競技者のコントロール下にあるとみなされる。

守備側競技者は、シザーズキックやオーバーヘッドキックに対して、体を回転させることなく飛ぶ、または相手競技者に向かって動いていないのであれば、偶発的に相手競技者に接触した場合であっても、反則を犯してはいない。

### ピッチの中央からまたは反則が犯されたところから行われるフリーキックで罰せられる反則

#### a)ピッチの中央からのフリーキック

(...)

ゴールキーパーが次の反則のいずれかを犯した場合、ピッチの中央から行われるフリーキックが与えられる。

- ・ 自分自身のハーフ内で、手や腕または足を用いて、4秒を超えてボールをコントロールする。
- ・ (...)

#### アドバンテージ

警告や退場となるべき反則に対して主審・第2審判がアドバンテージを適用したとき、この警告や退場処置は、次にボールがアウトオブプレーになったときに行われなければならない、しかしながら、反則が相手チームの決定的な得点の機会を阻止するものであった場合、競技者は、反スポーツ的行為で警告され、反則が大きなチャンスとなる攻撃を妨害または阻止したものであった場合、警告されない。

#### 警告となる反則

競技者は、次の場合、警告される。

(...)

- ・ 次の方法でプレーが再開されるときに規定の距離を守らない。
  - ドロップボール、コーナーキック、キックオフまたはキックイン／スローイン
  - フリーキック(守備側競技者のみ)

#### 得点または決定的な得点の機会の阻止(DOGSO)

競技者が、ハンドの反則により、相手チームの得点または決定的な得点の機会を阻止した場合、反則が起きた場所にかかわらず、その競技者は退場を命じられる。

競技者が相手競技者に対して反則を犯し、相手競技者の決定的な得点の機会を阻止し、主審・第2審判がペナルティーキックを与えた場合、その反則がボールをプレーしようとして犯された反則だった場合、反則を犯した競技者は警告される。それ以外のあらゆる状況(押さえる、引っばる、押す、またはボールをプレーする可能性がないなど)においては、反則を犯した競技者は、退場させられなければならない。

競技者、退場で退いた競技者、交代要員もしくはチーム役員が主審・第2審判から必要な承認を得ることなく、または交代の進め方に反してピッチに入り、プレーもしくは相手競技者を妨害し、相手チームの得点もしくは決定的な得点の機会を阻止した場合、退場の対象となる反則を犯したことになる。

DOGSO の状況かどうかを決定するにあたり、次の状況を考慮に入れなければならない。

- ・ 反則とゴールとの距離
- ・ 全体的なプレーの方向
- ・ ボールをキープできる、またはコントロールできる可能性
- ・ 守備側競技者の位置と数

#### **ファウルや不正行為の後のプレーの再開**

ボールがアウトオブプレーの場合、その前の判定に基づき再開される。

(…)

反則がピッチ外で競技者によって、自分のチームの競技者、交代要員またはチーム役員に対して犯されたならば、プレーは次のように再開される。

- ・ 反則が起きた地点から最も近い境界線上が反則を犯した競技者の相手競技者のハーフ内の場合、その場所から行うフリーキック。
- ・ 反則が起きた地点から最も近い境界線上が反則を犯した競技者のハーフ内の場合、ピッチの中央からのフリーキック。

競技者が手に持ったものでボールに触れた場合、プレーは、フリーキック(またはペナルティーキック)で再開される。

#### **第13条—フリーキック**

フリーキックが行われようとしたとき、ボールの方向に動きキッカーを妨害した相手競技者は、5m の最小距離を守っていたとしても、警告されなければならない。

#### **第14条—ペナルティーキック**

キッカーがボールを置いた後、守備側ゴールキーパーが交替を要求した場合、主審・第2審判は交替を認めるが、プレーの再開を遅らせたことにより、ゴールキーパーを警告しなければならない。

(…)

ボールがけられるとき、守備側ゴールキーパーは、少なくとも片足の一部を仮想のゴールラインに触れさせているか、仮想のゴールラインの上に位置させていなければならない。

ボールは、前方にけられて明らかに動いたときインプレーとなる。

(…)

ボールがインプレーになる前に、次のいずれかが起きた場合、

(…)

- ・ 守備側ゴールキーパーが反則をして、

- ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
- ボールがゴールに入らなかった、またはクロスバーやゴールポストからはね返った場合、ゴールキーパーの反則が明らかにキッカーに影響を与えたときのみ、キックは、再び行われる。
- ボールがゴールキーパーによりゴールに入るのを阻止された場合、キックは、再び行われる。

ゴールキーパーが反則を犯した結果キックが再び行われた場合、その試合において最初の反則については注意が与えられ、それ以降の反則には警告が与えられる。

- ・ 守備側ゴールキーパーの味方競技者が反則をして、
  - ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
  - ボールがゴールに入らなかった場合、キックは、再び行われる。
- ・ 競技者がより重大な反則(例えば不正なフェイント)を犯した場合を除き、両チームの競技者が反則をした場合、キックは、再び行われる。
- ・ 守備側ゴールキーパーとキッカーが同時に反則を犯した場合、キッカーは、警告され、守備側チームのフリーキックでプレーは再開される。

ペナルティーキックが行われようとしたとき、ボールの方向に動きキッカーを妨害した相手競技者は、5mの最小距離を守っていたとしても、警告されなければならない。

(...)

## 第15条ーキックイン/スローイン

### キックイン

ボールを入れるとき、キッカーは、次のようにボールをけらなければならない。

- ・ (...)
- ・ ボールがピッチを出た地点のタッチライン上またはタッチラインに近いピッチの外のグラウンドから、静止しているボールをける。

## 第16条ーゴールクリアランス

- ・ ボールは、ペナルティーエリアの任意の地点から守備側チームのゴールキーパーによって投げられるまたはリリースされる。
- ・ ボールは、投げられるまたはリリースされて明らかに動いたときにインプレーとなる。
- ・ チームがボールをインプレーにする用意が出来てから、または主審・第2審判がインプレーにする用意ができたことを合図してから、4秒以内にボールをインプレーにしなければならない。
- ・ 相手競技者は、ボールがインプレーになるまで、ペナルティーエリアの外にいななければならない。